

●2026 年 6 月 7 日

■「再生産戦線」と「フェイス・ツー・フェイス」

レント資本主義時代における労働運動・社会運動の再生のために

はじめに

現在、日本の労働運動は長期的な停滞の中にあります。組織率は低下を続け、春闘の成果も限定的です。職場における組合の存在感は弱まり、多くの若い世代にとって労働組合は身近な存在ではなくなっています。他の社会運動もこの傾向をまぬかれてはいません。

しかし、この停滞を単なる組織力の低下として理解するだけでは不十分です。問題の本質は、労働運動・社会運動が依拠してきた社会そのものが大きく変化していることにあります。

労働運動について言えば、20 世紀の労働運動は工業資本主義の時代の産物でした。ところが 21 世紀の資本主義は、金融化・プラットフォーム化・レント化によって大きく姿を変えています。

資本が変わったにもかかわらず、運動の側が従来のものであるならば、労働運動が影響力を失うのは当然です。私たちはまず、この変化を正面から認識しなければなりません。

1 レント資本主義への移行

マルクスは資本主義を剰余価値の生産と取得の仕組みとして分析しました。

資本は生産過程に投資し、労働者を雇用し、そこから剰余価値を獲得します。

しかし現在の巨大資本の多くは、必ずしも生産そのものによって利益を得ているわけではありません。検索エンジン。SNS。アプリストア。クラウドサービス。データプラットフォーム。こうした領域では、市場そのものを支配することで利益が得られます。

立教大学の佐々木隆治氏が論じているように、現代資本主義の中心には「レント資本」が登場しています。レントとは、本来は地代や独占使用料を意味します。現代のプラットフォーム企業は、ネットワーク効果と独占的支配を利用して、社会全体から利用料を徴収する仕組みを作り上げています。

彼らは生産活動の外部に位置しながら、社会的富の巨大な部分を吸い上げているのです。このことは資本と労働の関係そのものを変化させています。

2 搾取の重心は再生産領域へ移動している

この変化の結果として重要なのは、資本の収奪対象が職場だけではなくになったことです。医療。介護。住宅。教育。子育て。データ。自然環境。資本は人間が生きるために不可欠な領域を新たな利潤源として囲い込み始めています。

ナンシー・フレイザーはこれを「再生産の危機」と呼びました。資本主義は、労働力を維持するために必要な社会的条件を破壊しながら成長しているということです。

またシルヴィア・フェデリチは、家事・育児・ケア労働などの再生産労働が資本主義によって無償で利用されてきたことを明らかにしました。

資本は工場の中だけで労働者を利用しているわけではありません。家庭や地域社会においても、再生産活動を搾取し続けているのです。

現代のレント資本主義は、この傾向をさらに極限まで推し進めています。労働者は職場だけでなく、生活そのものから収奪される存在になっています。

3 なぜ労働運動は停滞しているのか

ここに現代労働運動の根本問題があります。

多くの労働組合は依然として、賃上げ、労働時間、雇用保障、を中心課題としています。もちろんそれらは重要です。しかし人々の不安はそこにとどまりません。

子育てできない。介護できない。医療費が高い。教育費が重い。住宅費が払えない。気候危機が深刻化している。現在の人々が抱える危機の多くは、再生産領域に集中しています。

にもかかわらず、労働運動はそれらを周辺課題として扱ってきました。結果として労働運動は、人々の生活世界全体を代表する力を失っていったのです。

4 再生産戦線という発想

ここで必要になるのが「再生産戦線」という考え方です。

医療運動。介護運動。保育運動。教育運動。住宅運動。環境運動。これらを別々の運動として捉えるのではなく、労働力再生産を守る共通の闘いとして再統合する必要があります。

マルクスの言葉で言えば、労働力は商品ですが、その商品は再生産されなければ存在できません。したがって再生産領域の防衛は、労働運動の外部課題ではなく本来の核心課題なのです。

この意味で、「賃金闘争＋再生産闘争」への転換が必要です。むしろ今後は再生産闘争こそが運動の中心になるでしょう。

5 SNSの罠

もう一つ重要な問題があります。運動そのものがプラットフォーム資本に依存していることです。この点は、労働運動以外の社会運動がより重大な影響を受けていると言えるでしょう。

Facebook。X。Instagram。YouTube。TikTok。これらはレント資本そのものです。社会運動は、それらのプラットフォームを利用して発信しています。しかし同時に、その仕組みに従属しています。

アルゴリズムは対立や感情的反応を優先します。短い言葉は広がります。複雑な議論は埋没します。結果として運動もまた断片化されていきます。

フォロワーは増える。しかし組織は強くならない。共感は生まれる。しかし行動には結びつかない。これは世界中で起きている現象です。

6 フェイス・ツー・フェイスの復権

だからこそ今必要なのは、直接的な人間関係の再建です。職場での対話。地域での交流。学習会。戸別訪問。街頭対話。共同作業。これらは単なる昔ながらの手法ではありません。プラットフォーム支配への対抗そのものです。人間関係を商品化するレント資本に対し、人間関係そのものを再建する営みだからです。

ニューヨークにおけるゾーラン・マムダニ氏らの運動の経験が示しているように、持続的な組織化は最終的にはフェイス・ツー・フェイスによってしか実現できません。SNS は補助的手段です。運動の主体にはなり得ません。

7 再生産中心社会への道

この課題は単なる運動論ではありません。社会のあり方そのものに関わっています。

現在の社会は、生産よりもレント取得を優先し、生活よりも利潤を優先し、再生産よりも軍事と金融を優先しています。

しかし持続可能な社会は逆です。再生産を優先しなければなりません。ナンシー・フレイザーの再生産論。シルヴィア・フェデリチのコモンズ論。これらに共通しているのは、人間の生活と自然の維持を社会の中心に据えようという発想です。

労働運動が再生産戦線を担うとは、この歴史的転換の主体になることを意味します。

おわりに

20 世紀の労働運動の合言葉は、「賃金を上げよ」「労働時間を短縮せよ」でした。

21 世紀の労働運動の合言葉は、そこに新たな二つを加えなければなりません。「再生産戦線をつくろう」。そして「フェイス・ツー・フェイスを取り戻そう」です。

レント資本主義の時代において、労働運動が再び社会的多数派を形成できるとすれば、それは職場だけでなく生活全体を守る運動へと発展したときです。そしてプラットフォーム資本に依存するのではなく、人と人との直接的な結びつきを再建したときです。

再生産戦線とフェイス・ツー・フェイス。この二つは単なる労働運動や社会運動の運動戦術ではありません。それはレント資本主義に対抗するための、新しい時代の労働運動と社会運動の戦略原理です。

6月3日

この数日の新聞記事などを見ていると、NVIDIA、Google、Amazon META などAI関連企業の株価高騰、相次ぐデータセンター建設計画発表等々の記事が目に着きます。これは新技術の急速な発達、産業構造の変革の問題なのか。いえ、それだけではありません。このことは、現代資本主義の下で労働者が置かれている状況全体に関わる問題、搾取や収奪のいっそうの強化、世界の分裂と対立の激化、軍拡や政治反動の強化と密接に結びついており、その背景を見ていく上で不可欠の問題です。